

書 評

Elizabeth Gargano, *Reading Victorian Schoolrooms: Childhood and Education in Nineteenth-Century Fiction* (New York: Routledge, 2008)

玉井 史絵

教育と文学というのは旧いようで新しい話題である。これまでも、英文学教育の歴史、女性教育と読書、労働者階級の教育と読書文化、文学のなかに描かれる教育など、様々な側面からヴィクトリア朝における教育と文学は論じられてきた。近年に出版されたものとしては、Brontë 姉妹の小説を通して見た当時の教育について詳細に論じた Marianne Thormählen の *The Brontës and Education* (CUP, 2007)、労働者階級の Shakespeare 受容を検討した Andrew Murphy の *Shakespeare for the People: Working Class Readers, 1800-1900* (CUP, 2008)、知識偏重の教育への文学の側からの批判を分析した Dinah Birch の *Our Victorian Education* (Blackwell, 2008) などがある。ヴィクトリア朝文学における様々な学校の表象を考察した Elizabeth Gargano の *Reading Victorian Schoolrooms: Childhood and Education in Nineteenth-Century Fiction* (Routledge: 2008) は、なかでもとりわけ興味深い。

ヴィクトリア朝は教育が国家の制度として確立していった時代である。Gargano は学校を描いた文学のなかに、規格化、標準化、画一化が進む学校教育と、そうした動きにそぐわない家庭での教育との相克を読み取る。小説家は、学校という空間に様々な家庭的要素を織り交ぜて描くことにより、非人間的な公教育の画一化を批判したというのが、彼女の議論の骨子である。Henri Lefebvre の空間論などに依拠しつつ、教師の部屋、校庭、医務室といった空間の表象を軸として小説に描かれた学校を分析しているのが、本書の特徴だ。

第一章では、学校建築とその背後にある教育哲学との関連を考察している。

ここでは、直線的で簡素な新ジョージ王朝様式が学校にふさわしいと論じた *School Architecture* (1874) の著者 E. R. Robson と、ゴシック的な建築を理想とした、Saint Mark & Training College の校長、Derwent Coleridge が対比される。一つの物事から次々に連想が触発されることで精神は発達するとした Hume の哲学は、19世紀の教育理論に多大な影響を与えたが、Robson にとっての学校とは、そのような子供の直線的な発達を促す場にほかならなかった。一方、Coleridge にとって教育は古典的リベラル・アーツであり、教会と深く結びついたゴシック的な建築様式こそがその理想を体現していたのであった。Gargano はさらに、*Hard Times* 論を展開し、直線的な Gradgrind の学校空間に、画一的教育への Dickens の批判が表れていると主張する。

以下の章は、学校における個別の空間表象が考察される。第二章では、教師の部屋という空間が分析の対象となる。厳格な規律が支配する教室とは対照的に、教師の部屋は生徒と教師が擬似家族のようなつながりによって結ばれ、生徒が個人として尊重される場として描かれる。ひとつひとつの目に見えるカリキュラムによって構成される学校教育とは異なり、家庭教育は包括的であり、神秘的である。それゆえ、*Jane Eyre* における Miss Temple の部屋や *David Copperfield* における Dr. Strong の学校は、神聖な家庭的空間を創造することで、非人間的な学校教育に対する反証として機能しうるのである。だが、商業主義の支配する社会にあって、家庭教育は実現不可能な理想でしかありえないという矛盾をはらんでいるとも、Gargano は指摘する。第三章では、校庭の果たす役割が考察される。制度として厳格に規格化された公教育の場において、校庭は自然が取り込まれる場所である。*Tom Brown's School-days* のように男子教育が主題となっている作品では、男子生徒が自身の内にある野生的性質を制御し、やがては自然を所有物として統制する力を養う場として、校庭が描かれる。一方、女子生徒の場合、校庭はみずからが男性の所有物であることを学ぶ空間であるが、*Jane Eyre* のような作品では、男性の支配に抗う女性の本性が発露する場と化す。だが、そのいずれにおいても、校庭の自然は、規格化された公教育を正す役割を担っているというのが、この章の結論である。最終章で取り上げられるのは医務室だ。Herbert Spencer は過度の教育は身体的退化、病的感情、愚鈍といった様々な病理を生み出すと論じた。*Dombey and Son* の Paul Dombey、*Tom Brown's Schooldays* の George

Arthur といった敏感な子供たちは、そのような教育の過ちの結果として病にかかる。医務室は家庭的な教育が回復される空間であり、画一化が進む学校教育に対する教師や親たちの最後の抵抗の場となるという結論に達して、本書は締めくくられる。

教育と文学というのは旧いようで新しい話題である、この書評の冒頭に述べた。教育とはいつの時代においても人々の関心事でありながらも、その関心のあり方は時代とともに変遷する。たとえば、Richard D. Altick の *The English Common Reader: A Social History of the Mass Reading Public, 1800-1900* (U of Chicago Press, 1957; 2d. ed., Ohio UP, 1998) は、19世紀イギリスにおける労働者階級の読書文化について論じたものである。Altick の関心が知識の一般大衆への普及のプロセスに向けられたのは、この本を執筆した1950年代が、高等教育の大衆化の時代だったからであろう。それから50年あまりを経た現在、Gargano が追及するのは、19世紀の文学が画一化、規格化されていく公教育をいかに批判したかというテーマである。このテーマは、効率性を求められる教育現場において文学の役割を模索する多くの文学研究者たちの、切実な問題意識の反映といえよう。その意味で、教育空間の表象と教育の思想・哲学を論じた第一章はとりわけ興味深い。私たちが日常の教育活動のなかで自明のこととして受け入れている、机が教卓と対峙して直線的に並ぶ教室という空間は、実は子供・生徒・学生の直線的な発達を前提とする教育思想の反映なのだということに、Gargano は気づかせてくれる。文学はそうした空間を批判的に描くことで、直線的な発達では説明できない、より複雑で有機的な成長のあり方が存在することを訴えようとしたという彼女の議論は興味深い。彼女はさらに、文学の社会批判は現実の社会を変える力にもなりえたと主張する。彼女は、*Nicholas Nickleby* の Dotheboys Hall や *Jane Eyre* の Lowood の描写が、学校の劣悪な教育や衛生環境に対する世論の批判を高めた例を挙げて、「小説家はレンガと漆喰ではなく、言葉によって学校を形作ったが、それにもかかわらず、現実の実質的な組織にも直接的な影響を及ぼした」(5)と述べている。このように社会への批判力としての文学の機能を擁護する議論は、文学の存在価値が疑問視されつつある今日の教育現場において、重要な意義を持っていると言えよう。

Gargano の論旨に共感を覚える一方で、疑問をはさむ余地があることもま

た、指摘しておかなくてはならない。彼女は画一化、規格化された制度としての公教育に対する、文学の側からの批判という側面を強調するあまりに、小説家たちが教育の画一化、規格化に時には積極的に関わっていたという事実を見逃している。「ヴィクトリア朝の小説家たちは、魂のない標準化された教育から労働者階級の子供たちを守ろうとした。それはひとつには、そのような標準化が中流階級の子供たちにとって、潜在的な脅威となることを彼らが認識していたからにちがいない」(5)と Gargano は論じている。だが、たとえば、Dickens は確かに *Hard Times* や *Our Mutual Friend* のなかで、労働者階級の画一的教育に対して厳しい批判を展開したが、*Household Words* や *All the Year Round* などのジャーナリズムでは、逆にそれを擁護し、推進する立場を取っていた。これら二つの雑誌に掲載された彼自身や他の記者の手による貧民学校や救貧院学校などの記事を見る限りにおいては、Gargano の主張を補強するような記述を見つけることはできない。教育と文学の関わりは決して一様ではない。文学は時には公教育を批判し、また時には公教育のなかに巧みに入り込むという、したたかな戦術を使いこなしていたのではないだろうか？ そのしたたかな戦術を分析するには、Gargano の呈示した学校教育と家庭教育の相克という図式以上の複雑な構図を想定しなければならないだろう。また、小説家たちの小説を超えた現実社会での教育に対する取り組みをも検討する必要がある。

このような問題点ははらみながらも、本書が教育と文学に関する研究の新たな展開を生み出すものであることは間違いない。教育における文学の意義とは何か？ 人文学が危機的状況にある現在だからこそ、私たちは今一度この問題を真摯に受け止める必要がある。本書のような研究書は、私たちが教育とは何か、文学がどのように教育に関わっているかを考えるうえで助けとなる、様々な指針を与えてくれるだろう。